

D-3					
主題	福祉施設における社会貢献としてのSDGsの取り組み方についての一考察				
副題	ブームで終わらせないSDGsのすすめ				
キーワード 1	SDGs	キーワード 2	社会貢献	研究(実践)期間	18ヶ月
法人名・事業所名	社福) 友愛十字会 砧ホーム				
発表者(職種)	三浦好顕(副主任介護職員)、雨宮和美(管理栄養士)				
共同研究(実践)者	小谷野祐樹(副主任機能訓練指導員)、元山大輔(副主任生活相談員)				
電話	03-3416-3164	FAX	03-3416-3494		
事業所紹介	<p>砧ホームは、平成4年に東京都世田谷区砧(きぬた)に開設した、入所定員60名、短期入所4名の従来型の特養です。都内特養で唯一の東京都ロボット介護機器・福祉用具活用支援モデル事業のモデル施設で、様々な介護ロボットとICTシステムを運用し、専門性と生産性の高い最先端の取り組みを推進しています。</p>				
<p>《1. 研究(実践)前の状況と課題》</p> <p>世界中でSDGsが推進されるなか、我が国の福祉・介護業界においても行動計画を宣言する団体や事業所が現れてから久しく、施設に届く広報誌や活動報告書の類には目標(ゴール)を象ったアイコンを目にすることが日常的となった。また、業界関係者の中にも、それぞれのゴールの色を使った丸型のカラフルな襟章を付けたり、名刺にロゴを記載する人も珍しくなくなった。最早、SDGsはブランディングの一環としてさえ用いられる様になっていた。</p> <p>自施設においても社会貢献の一環として、令和3年度の事業計画にSDGsの推進が掲げられ、17項目のゴールに向け活動を行うことになった。確かにSDGsのゴールには、福祉・介護業界にとって馴染みがあるものもいくつか存在するが、ありがちなのが元々やっていた活動を目標に当てはめただけのフリーライダー的なアクション設定であった。先行事例の中には、SDGsがなくても実施すべきことさえSDGs故の活動に置き換えているケースが少なくなく、SDGsを形骸化させる要因と成り得るとしてWGでも問題視していた。自施設がSDGsに向き合うにあたり、“ついでの活動”ではなく“敢えて行動すること”に意義を求め、実感を伴う自施設らしいアクションを設定し活動することが課題となった。</p> <p>《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》</p> <p>目的：福祉施設が行う公益的な活動として、SDGsに根ざした社会貢献活動を持続的に行うことを可能とするモデルを示すこと。</p> <p>仮説：福祉施設がSDGsに取り組むに際し、元々の事業活動に左右されることなく独自のアクションを設定することで、職員個々が主体的に取り組める社会貢献活動として、運用の持続可能性を確保することが可能となるのではないかと。</p> <p>《3. 具体的な取り組みの内容》</p>					

令和3年度を迎えるに当たり、施設長の発信で有志による活動メンバーが募集され、応募者によるWGが立ち上がった。当初WGに応募したのは、2名の介護副主任と機能訓練指導員で、後に管理栄養士も加わり、施設長をオブザーバーとして活動を開始した。

WGは毎月定期的開催することとし、まずは活動指針を作成した。WGメンバーがSDGsの理解を深めることからスタートさせ、同時に他法人や異業種におけるSDGsの活動のベンチマークを重ねた。施設職員に対しては、SDGsに取り組むにあたり啓発本をスタッフルームに設置し、誰もがいつでもSDGsを学べる環境を整えた。その後、全職員からアクション案を募り、全17項目に対する施設独自のアクションを決定した。17項目の各ゴール(①～⑰と記す)に対する施設独自に決定したアクション(または標語)は次の通りである。

①あなたの服をワクチンに(古着 de ワクチン)、②検食を完食しよう、③第二水曜日はノー残業デー、④研修報告書を閲覧しやすくデータ化する、⑤福祉用具を積極的に活用し、女性も長く働ける職場環境を作ろう、⑥トイレはキレイ使おう、⑦誰もいない居室の電気は消そう、⑧毎月テーマを決めてグッジョブカードで讃え合う、⑨情報を外部に発信して未来の介護を作ろう、⑩外国人実習生に母国語で挨拶をしよう、⑪介護の知識を街のみんなに、⑫紙様は見ています 紙を大切に、⑬その1℃が温暖化を招きます、⑭トロミを流さず燃えるゴミへ、⑮ベランダで緑を育てる、⑯ハラスメントに気をつけよう、⑰介護機器の開発に協力しよう。

令和4年度には「SDGs推進会議」に活動名称を改め、本格的にアクションの実践を開始した。ゴールを象ったアイコンとアクションを記した啓発カードを作成して施設内の関連する場所に掲示し、またデジタルサイネージを活用して利用者も含め施設全体に活動を呼びかけた。

《4. 取り組みの結果》

独自のアクションに留まらず、従前の諸活動までもがSDGsと結びつけて展開されるようになり、ほどなく施設の行動理念の一つとなった。SDGsは世界を変えるための目標であるが、実践するほどに職場環境を変える活動として、組織や利用者の暮らしを活性化していった。

《5. 考察、まとめ》

社会福祉法人として公益的な活動が求められる中、世界も地域の延長なれば、福祉施設や事業所がSDGsに取り組むことは当然の成り行きであろう。しかし、元々やっていた活動を目標に当てはめただけでは、SDGsに取り組んでいる実感も薄く、行動変容が起こりにくい。自分たちが行動するための自分たちのアクションを自分たちで考えることにより、SDGsは行動理念の一つになり、真に持続可能な取り組みになることができると考えられる。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

マンガで学ぶSDGs「学べるは当たり前? 貧困/健康/教育/平等」、「エネルギーってなくなるの!? エネルギー/まちづくり/防災/平和」、「なんのために働くの? 労働/産業技術/平等/責任」、「自然環境が危ない! 衛生/気候変動/資源/多様性」(2021)、蟹江憲史、金の星社

《8. 提案と発信》

一時はメディアで取り上げられない日はないくらい注目を集めていたSDGsですが、オリンピック、パラリンピックが終わると同時に影を潜めてしまった様に思います。「変わりたくなければ変わらないといけない」という名言がありますが、SDGsをブームで終わらせないためにも、私たちは真剣に、日常を変えていかなければならないのではないのでしょうか。